2023年2月26日（日）主日朝礼拝説教

『預かったタラントン』井上隆晶牧師
コヘレト11章 1～6節、マタイ福音書25章14～30節

❶【タラントンは何のために与えられているのか】

イエス様の生涯の終わりの方になると、目を覚まして終末に備える話が出てきます。今日はその中から「タラントンの譬え」を学びましょう。ある人とは「神キリスト」であり、僕たちとは「すべての人間」を意味しています。主人であるキリストは僕たちを呼び、それぞれの能力に応じて、一人には5タラントン、もう一人には2タラントン、もう一人には1タラントンというご自分の財産を預け、旅に出かけます。旅に出かけるというのは「昇天」を意味し、やがて帰って来るのは「再臨の時、週末の時」を意味しています。今の時代というのはキリストがおられない（留守中）ように見える時代なのです。その時代に生きる私たちは、与えられたタラントンを用いて増やさなければなりませんし、やがて世の終わりにはキリストの前に立って決算報告をしなければならないのです。ルカ福音書では「**私が帰って来るまで、これで商売をしなさい**」（ルカ 19：13）とはっきりと書かれています。ではこのタラントンとは一体何を意味しているのでしょう。タラントンはギリシャの計算の単位ですが、1タラントンというのは労働者の16年分の賃金に相当します。相当な額です。それは私たちに与えられた信仰、寿命（時間）、健康、能力、財産などの賜物を意味していると思われます。神様は一人一人の管理能力に従ってそれらを与えられます。だから皆、与えられている物が違うのです。**それは神と人に仕えるために与えられたものです。大事なことはそれらを神と人の為に用いたかどうかです。**管理とは、仕舞い込むことでなく、用いる能力のことです。

●例えば良い声をいただいたとしましょう。それは神を賛美し、歌うためです。私など頑張っても高い声が出ません。朝は尚更です。声が出る人が羨ましい。「モニタリング」という TV 番組でオペラ歌手の人が大工に化けて、突然歌い始めると周りの人はどんな反応を示すか、という番組をしていました。周りの人は涙を流して感動しました。歌は人の心を和ませ、癒す不思議な力があります。

広い家を与えられた人は、それを集会に使い、困った人を泊めるために与えられたのです。豊かな財産を与えられた人は、それを困っている人に施す為です。車を与えられた人は、他者を乗せるためです。健康で頑強な体をいただいた人は、それで他者の為に働くためです。人間に罪が入ると、その豊かな賜物を人の為に使うのではなく、自分の喜びの為だけに使おうとします。ある教会に行った時、「古代の祈祷書」があり、私は「宝物を見つけた」と思いました。しかし彼らはそれを外に出さず、皆の為に用いようとしませんでした。私は「宝の持ち腐れ」だと思いました。**持っていても、用いなければ腐るのです。何かを与えられたのは当**

然ではないのです。私は与えられた賜物を生かしていない人がいるのを見ると、「もったいないな」と思います。賜物が与えられていながらそれを使わないなら、「要らないんだ」ということで、その能力は取り上げられてしまうでしょう。

❷【土に埋めた僕の言い訳】

清算の時が来て、5タラントン預かった僕は、前に出て「**ご主人様、５タラントンお預けになりましたが、ご覧ください。ほかに５タラントンもうけました**」（25：20）と報告すると、主人は「**忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。**」と褒めてくれます。ちなみに「**忠実な**」というのは原語では「信頼できる」という意味です。２タラントン預り、ほかに２タラントン増やした僕にも同じ言葉で褒めてくれました。しかし１タラントンを預かった僕は与えられたタラントンを使わずに土に埋めてしまいました。彼は「**あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり…地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。**」（25：24～25）といいます。つまり神は与えずに要求ばかりする厳しい方だと思ったので使わなかったというのです。**自分の怠惰を神のせいにしている言い訳のようにも聞こえます。本当はもっと与えられるはずなのに、少なかったので神に腹を立てて用いなかったのでしょう。「これがあなたのお金です**」という言葉は、「私のものではない！」と言っているようです。彼は主人が与えたものを喜んでいません。主人は「**怠け者の悪い僕だ。…それなら、…銀行に入れておくべきであった。**」（27）といいます。（途中の言葉は神の皮肉）銀行に入れろとは、自分で使うことが嫌なら、他人に仕えて増やしてもらえということです。そこで、その僕から賜物は取り上げられ、用いることのできる他の僕に与えられてしまいました。「**だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。**」（29）のです。**満足し、感謝する心を持っている人は、更に与えられて豊かになるでしょうが、満足し、感謝できない人はやがて与えられているものも失うのです。人生とはそういうものです。**

●作曲家のイーゴル・ストラヴィンスキーは、かつてバイオリンのパートが非常に難しいフレーズのある新曲を書きました。何週間かのリハーサルの後で、バイオリニストがストラヴィンスキーの所へやってきて、その部分が難しすぎてどうしても弾くことが出来ないと言いました。するとストラヴィンスキーは答えました。「それはよくわかるよ。私が求めているものは、それを弾こうと努力している音なんだよ。」

神様が私たちや教会に求めておられることもそれと同じなのです。主が求めておられるのは教会をいくつ建てたとか、どのくらい信者を増やしたかとか、立派な事業を成し遂げたかという成果ではないのです。忠実であったかどうかです。つまり与えられた賜物を感謝し、喜んで一生懸命に他者の為にそれを用いて生きたかどうかなのです。

❸【タラントンを用いて何を増やすのか】

では私たちはそれらのタラントン（賜物）を神と人の為に用いて、一体何を増やし、何を報告するのでしょうか？あるヒントになる話をしましょう。

●あるご婦人の息子さんはうつ病になり入院して治り、しばらく良かったのですが再びうつ病になって二年半休職しました。彼は自分のうつ病の事を母親に「調子が良い時は三軒隣りにうつ病がいるけれど、調子が悪くなると隣に来る」と言ったそうです。それを聞いて母親は「私はもう息子からうつ病を取り除こうと思わなくなりました。前は息子に指示ばかりしていたけれど、物の考え方が根底からひっくり返されました。息子は病で体がしんどい時、『大丈夫と、言われるだけで良い、後はもう何もいらない』と言うんです。今は病気があっても大丈夫という信仰になりました。」とおっしゃいました。それを聞いて、私は、昔うつ病を患う信徒の方が、他の人がパニックになって倒れた時、その人の側に行って手を握り、抱きしめ「大丈夫、大丈夫」と言っていたのを思い出しました。

●また先日、教師一日研修会で「カルト宗教」について学びました。講師の先生は「問題を解決しよう(脱会させる)と思わないで、問題を抱えながら生きることが大事です。」と言われました。合同結婚をし、子供が生まれたらもう元に戻れません。講師の先生は合同結婚式を挙げた人は、別れるようには勧めないと言います。カルト問題は解決できることより、解決できないことの方が多いのです。東日本大震災の後「復旧、復興はしないのだ」という事を東北の人たちは学んだといいます。カルトは「～をしたら問題は解決します」と提示しますが、教会はそうであってはなりません。「問題があるまま生きている人間を、そのまま祝福するのが宗教です」と言われました。

この二つの話は良く似ていると思いませんか？課題は違うけれども、どちらも同じ答えに至っています。つまり「問題があっても大丈夫」ということです。人生には様々な試練があります。**失うこともありますが、与えられているものの方が豊かなのです。それが見えてきた時、私たちは「何があっても大丈夫」と言えるようになるのです。そして感謝と平安が湧いてくるのです。**自分の事を考えても、神様から与えられた寿命、信仰、賜物、多くの人との出会いなどで私はこんなにも豊かな人生が送れました。すべては神様のお陰でした。感謝しかありません。これが神の前で私たちが報告することだと思います。

ヘンリ・ナウエンは「自分の罪は取り去られており、ただ神だけが人を救うのだと気づくとき、私たちは自由に仕えることができる。そして真に謙遜な人生を送ることができるのである。」といっています。もう一度、いかに私たちは豊かな恵みをいただいたのかを思い出し、いただいた賜物を感謝し、これからも与えられた命や信仰を精一杯、神と人の為に用いてゆきたいと思います。